

---

# 夢の中の刑事物語

サムライ上官

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢の中の刑事物語

### 【Nコード】

N66590

### 【作者名】

サムライ上官

### 【あらすじ】

近年起こるテロリズムに対抗する刑事たちの話

## 始まり

「犯人はお前だ!!」

夕焼けの光が射す茶の間のテレビをじつくりと見つめる。

テレビでは若き刑事が犯人を崖へ追いつめ

自分の推理を語っている

その後犯人は自分の犯した事を

認め泣きながら刑事にしがみ付いた

その刑事のカッコよさに

引き寄せられるように自分には

硬く心に決心するものが有った

刑事になりたい!

\* \* \* \* \*

「もうこんな時期になるのか」

桜舞う並木道をつんつん頭の金色のバッチを付けた

スーツ姿の男性が桜を鑑賞しながらゆつくりと歩いてきた。

鮮やかな桃色に染まる道は華やかである。カップルや通勤者、ジヨ

キングをする人で

並木道はにぎわっていた男性ははそこを縫うよう歩いていた。歩い

ているとズボンのポケットに

入っていた携帯電話が鳴り出し、携帯電話を開いて見るとメールが

一通届いてあった。

しかめた表情でメールを開くと『部長』という差出人で

早く警視庁に来い!という激が書かれたメールが届いていた。

そうこのメールが意味するのは『遅刻』という事である。

メールを見ると直ぐに駆け足で男性は桜吹雪の中を通っていた。数分走ると街中に威嚇の有る建物が見えてきた。そうそれが警視庁である。

男性は信号を渡りすぐさま正面の入り口から入っていった。中には様々な服装をした人が

沢山おり、色んなバッチをつけていた。男性は辺りを見回してまた走った。

警視庁それは日本における犯罪を取り締まる最高部署で有る。犯罪と言つても広々としたもので

それに専門の部署が警視庁には有る。男性は自分の専門部署を探し薄暗い所にある階段を使い

2階へ駆け上がり『テロリズム取締課』のドアで止まった。

『テロリズム取締課』それは近年日本で見られるテロリストによる活動テロリズムを阻止する

部署で有り凄腕の能力の持ち主たちが集まっている。

そして物音一つ立てずにドアを開け部屋に入った。部屋は広々としており警官一人一人の机がビッシリ並んでおり一番奥には部長席が有りその隣にはホワイトボードが有った。朝という事もあり中は一段と忙しそうであった。男性はこれに乗り遅刻を紛らわせようとしたがドアが開閉しているのを部署の全員が

見ており紛らわすことは出来なかった。そして男性は遅い足取りで一番奥の部長席に行った。

部長席には高性能そうなノートパソコンと

書類などが積まれており机の端には『テロリズム課部長浅倉』という札が置いて有った。

オールバックの茶色い髪の色をしている30歳ぐらいの浅倉が背もたれの大きな椅子に座り

腕を組み眉間にしわを寄せ今か今かと待っていた。

そして男性が来ると腹の底から大声で話出した。

「相原！今日から新年度だぞ！新年度そつそつ遅刻をしてどつする！」

「すいません……」

朝から早々怒られる相原を見ている部署の人間はクスクスと笑い出した。相原は小さくため息を

出したがすぐに浅倉に指示されますます気が重くなった。

浅倉は落ち込んでいる相原を見ると椅子から立ち上がり部屋の右隅の方に居た少し髪の高い青年を呼び寄せた。青年は走って部長席に駆け寄った。相原に顔を上げさせて浅倉は話し出した。

「今日からテロリズム取締課に配属になった神崎だ。高校卒業でこの部署に配属になり、

剣道では高校の日本一になったそうだ。部下がないお前にこいつが立派になるまで

面倒をみるようになった。頼むぞ相原！」

面倒な気持ちを抑制し神崎と握手を交わした。そして部屋の右隅の相原のデスクに鞆を置くと

テロリズム取締課の部屋を出て直ぐ隣にあるロッカールームへ相原は向かった。

その相原を追いかけるように神崎も走って相原を追いかけた。

その姿を浅倉は見て笑みを浮かべデスクに有る書類を書き出した。

今日神崎は新人刑事として歩き出すのであった。

## 訓練(?)

テロリズム取締課の隣に有るロッカールームで運動着に着替えた相原と神崎は

相原の意向でトレーニングルームへ神崎を誘導した。

トレーニングルームのドアを開けるとそこからは

酸っぱい汗のニオイと熱気が二人に漂う。

相原は何も言わず中へ足を踏み込んだ

その後には神崎もついて行った 中にはランニングマシンなど刑事としての

重要なスタミナ等を補う物等が多数置いてあった。

中には民間人には見慣れない機械も沢山あっただろう。

しかし、相原はそれを無視する様に奥に入っていった。

そして、灰色の金属製のドアを開き外で中をじっくりと拝見している神崎を押し込んだ

中には畳が36畳ほどの広さの畳があり特にこれという物は無かった。

一見すればただの畳部屋と言っても過言ではない。

相原は神崎を部屋の中心部に呼び寄せた。

神崎は相原の正面に立ち相原の説明を聞いた。

「今からお前の格闘の実力を見せてもらおう。ルールは畳に寝転んだ良いな？」

はいっ！と大きな返事をする相原は手で神崎を挑発してみせた。

神崎は、刑事の実技試験で出た柔道の時の事を思い出し守りの構えを相原にして見せた。

それを見た相原は、軽く頷きいくぞ！とさっきの雰囲気とは違った面を見せた。

そしてその場で跳びあがった。視線を跳びに集中する神崎に相原は跳び蹴りを放った。

鋭くそして速い跳び蹴りが神崎の体を襲うが神崎はこれをギリギリのサイドステップでかわし、

上手に跳び降りた相原の背後から力一杯の拳を放った。

相原はそれを読んだ様に、跳び前転をし拳をかわした。そして瞬間的に体を神崎の方に向けた。

神崎は二発目の拳を放った。二発目は最初のより速さと力が変化しており強くなっている。

相原はそれに自分の拳を思い切りぶつけた。拳と拳が果てしない力と共にぶつかり合う。

相原の拳の方が力を持っており神崎を付き放つと利き手ではない左拳で先鋭なる一発を神崎の胸に

撃ったが狙いを軽く交わされ直撃を防がれてしまった。両手で拳を放った相原は無理な体勢ですぎがあるのをとっさに見た神崎は顔面狙いの回し蹴りを放った。男子高校生の体をしながらも脚の長い神崎の回し蹴りはリーチが大きく威力も大変大きくこれをまともに受けたらいくら相原でも倒れることはままならない。相原は体勢を低くし回し蹴りを後頭部スレスレでかわした。そして回し蹴りの隙を見せた神崎に

タイキツクを思い切り背に直撃させた。直撃を受けた神崎は前傾しないように耐える。しかし、

相原の鋭い右の拳がまだ痛みが有る背に直撃し神崎は畳に倒れこんだ。

そして仰向けになり下から相原を見つめた。

相原は倒れこんだ神崎の腕を引っ張り上げ神崎を立たせた。お互いの顔は汗まみれだった。

そして真剣な表情で相原は話し出した。

「確かにお前の実力は採用試験の実技試験では甘かっただろうがそれではテロリストたちには勝てない。もっと練習をしな。」

神崎は大きな声で返事をした。そして右腕で汗を拭い相原の話を聞いた。

「まずランニングを毎日欠かさずやりその後筋力トレーニングを200回ずつやれ。」

この2つさえしておけばいかなる状況下でも対等に戦うことが出来るだろう。」

話を終わると相原はドアに向かって行った。そして後ろを向き

じゃあ今日は解散ね。まあ俺ぐらいは倒せるようになるよと生意気な口調で言い出していた。

その後神崎はトレーニングルームに有ったサンドバックに一日中拳を放つのであった。

全てはテロリストたちに対抗する為と上司相原に勝つことで有った。



## 訓練から

神崎が刑事になって3週間が経過した。相原に命じられて毎日欠かさずしている練習のおかげで

神崎は全体的に高度な能力を身に付ける事が出来た。それを見た相原は神崎に射撃訓練を始めた。射撃訓練とは数十メートル離れた的に

正確に撃つ訓練で新人刑事を悩ます壁とも言えるだろう。相原は取り合えず神崎を射撃室に呼び寄せた。コンクリートの壁が部屋を被い尽くしている。部屋には鉛の二オイがかすかに漂っていた。相原は5つある的の中の3番を選び神崎を連れて行った。

全ての場所には仕切りがあり流れ弾を防ぐ役割をしている。相原が連れて行った3番も同じような造りになっているが、流石に二人分入るのは厳しかったので、最初に相原が手本を見せるということになり神崎が後ろで見る形をとった。相原はその場の机に置いてあつた拳銃『サムライエッジシ』を手に取り弾をマガジンに詰め込んだ。

サムライエッジシとはイタリアが生産国の拳銃『ベレッタM92』をカスタム・アップした物である。日本刀の刃を連想させる『スライド』が特徴である。

そして、的をじっくりと見つめ狙いを定め引き金を引いた。サムライエッジシから放たれた弾は電光石火のごとく一撃で的の真ん中を捕らえた。そして直ぐに狙いを定め思い切り弾を放った。弾は一気に前とは変わらず真ん中を捕らえた。これを見た神崎は啞然としてその場に立ち尽くしていた。それを見た相原は軽く笑い、こんなのは慣れだよと言い

神崎にサムライエッジシを渡し後ろへ下がった。そして相原に、やっつてごらんと言われ

的の直線状に立った。そして、相原と同じ手順で弾を詰め込んで、的に狙いを定めた。

サムライエツジシの重みと実戦の緊張感が神崎の心を委ねる。軽く深呼吸をして引き金を

軽く引いて見せた。弾は神崎が狙った中心部を大きく逸れ床に当たった。

- 何故だ今のは標準も逸れていなかったのに。

「手が震えて標準が逸れているぞ」

相原が神崎の心を読んだように呟いた。神崎は自覚した。自分がこの人生の中で銃を

握ったといえば試験の1度だけである。しかし、何故こんな事が分かるんだ、神崎はもう一度サムライエツジシを構えた。震えてサムライエツジシがずれないように慎重に

標準を合わせ引き金を引いた。銃は中心部を逸れの下方に当たった。

「何っ！、2回目で的に当てたというのか！」

あの浅倉さえで2桁位の弾を使ったというのに

コイツ………

相原は神崎の背を見ながら驚愕した。神崎はマガジンに残った最後の弾を放とうとしていた。前にやった通り慎重に標準を合わせいざ、放った。サムライエツジシから放たれた弾は一直線にさつき相原が当てた風穴に入り込んだ。余りにも偶然に神崎はガツポーズを相原にして見せた。その後神崎はその場に有った弾が無くなるまで射撃練習を

した。1発目と2発目意外全て弾は中央部を捕らえた。正に神技と言っても良い位だ。

これを見た相原は直ぐに浅倉に連絡を入れた。信用していないのか浅倉は態々練習を

見に来たが結果は変わらず全て中央部に当てるという結果になった。それを見た浅倉は

ガツチリと神崎の手を握り締め、おめでとう、明日から捜査官として動いてもらうよと言いきこから立ち去った。この瞬間神崎は捜査官として認められた。喜んでいゝ神崎に相原はこう言った。

「話がある……」

## 初任務前夜

「話がある……」

急な相原の言葉に神崎は軽く驚いた。相原の顔を見つめていると相原はドアに向かって

歩き出した。それを神崎も追った。相原は大して急いではないなかったが見失つてはいけなと神崎は出来るだけ相原に付き添った。相原は、デスクに一旦戻り浅倉に挨拶をして

そのまま帰りの支度を始めた。神崎も支度をして相原が支度を終了した間際に相原の前に

立ち尽くした。相原は頷きそのまま神崎と一緒に麻薬取締課の部屋を後にした。

廊下を歩いていると相原の革靴から透明のクリアファイルが突き出していた。神崎は気を使い相原にクリアファイルが出ていますよと言った。

それを聞いた相原は即座にクリアファイルを靴に入れた。そして、神崎に警視庁の前に居ろという指示を出し駐車場に車を取りに行った。

神崎は警視庁を出て駐車場から出てくる相原を待った。

そして助手席に

乗り込みそのままいつもの所へ向かった。

\* \* \*

警視庁から車で走って十分が経過した。相原の車はちょっと媚びれた商店街に着いた。

夕方時なので大いに商店街はにぎわっていた相原は近くのパーキングエリアに車を止めた。

駐車切符を受け取りそのまま真っ直ぐ歩いた。数分歩くと赤色の看板をした中華屋が見えてきたそしてそのまま中華屋の方へ歩いて行った。

中華屋に近くなるにつれて中華料理独特のニオイが道に溢れていた。仕事帰りでもあり二人の空腹は頂点に達しており、

目の前に中華屋が光った。すると相原がそこで止まり中華屋を見下ろした。

近くで見ると意外と古そうな店で看板もここ数年掃除していないみたいであった。

しかし相原は店外にあるメニューを見ると神崎に入るぞ、と言いそのまま店へ入って行った。神崎も続いて入った。

入ると油で汚れた壁が全体に映し出されたがそこまで気にするほどの汚れではなかった。カウンター席に2、3人の男女がラーメンをすすっており、それ以外の客はいなかった。相原は入り口付近にあるレジの前に立ち店員が来るのを待っていた。

すると30代ぐらいの女性が相原を見つけ小走りでこちらへ来た。レジの前に立つと何かを見つめるような顔で二人を見た。

そしてパツとした表情で調理をしている男性を呼びつけた。すると男性も小走りでこちらへやって来た。バンドナを外し金髪の髪が軽く揺れる。

そして今日相原達が来るように予想していた様に相原に話しかけた。

「いらっしやい、待ってましたよ。アニキ」

男性は笑みを浮かべると神崎の方を見つめた。

「ほおこれが新しい新人さんかあゝ若いですね。」

相原は一步前に出て神崎を男性達に紹介した

「そうだコイツが俺の部下の神崎だ。」

二人の男女は納得し軽く頷いた。するとその二人も自己紹介を始めた。

「俺はこの中華屋の店主星野や。以後お見知りおきを。」

星野は軽く一礼をすると、女性の紹介に移った

「この子はここでアルバイトをしている近藤だ。」

近藤は一礼をすると、そのまま料理を作りに行ってしまった。

星野はそのまま残り話を続けた。

「貴方がここに来るといふ事は、仕事関係で来たんですね。では個室に案内しますので付けて来てください。」

そういふと星野は相原と神崎を連れ奥の方の堀で囲まれている席に案内した。

何故かこの席だけが設備が良く油の汚れも少なかった。星野は流し台へ行き布巾を

熱湯に浸し、それで相原達の机を磨いた。そして、メモ帳を出し注文を聞いた。

相原はメニューも見ずうどん2つ、と言った。星野はメモ帳にそれを書くときずくさま

料理に掛かった。星野が行く所を見た相原は鞆からクリア・ファイルを取り出し中に入っていた書類を机に載せた。

そして指で重要な所を指して神崎に教えた。

「金城かなしろ 隆弘たかしろ 麻葉密売及び連続殺人行為で指名手配ですか……」

黙々と書類に目を付けている神崎に相原はこう言った。

「俺たちが始めて任務に付く最初の大物ターゲットだ。」

「でも、まだ浅倉部長から指示が出ていませんし……」

戸惑った表情を浮かべる神崎に相原は強く言い切った。

「入って直ぐのお前に言うのもあれだが、警視庁内にはスパイが居る。」

「……！！」

体を裂くような相原の発言に神崎は言葉も出なかった。その様子は相原からも窺う事が出来た。

「俺たちはスパイにこの情報が伝わる前になんとしても金城を捕まえなくてはならない」

相原は握り拳を机に置き、言い放った。

「明日任務開始だ。頼むぞ、相棒。」

「ハイ！」

二人はガツチリと握手を交わした。すると、鯉節の利いたうどんが2つ運ばれてきた。

「今日は俺の奢りだ。たらふく食え。」

「ありがとうございます！」

空腹だった腹を満たすためと明日の任務のため二人はうどんを汁の一滴も残さず食べつくした。

## 初任務

藍色の海が輝いているここはとある港。工場地帯が広がり輸送船がビツシリと港に定着していた。数知れない有名会社のコンテナ等が無数に建てられている。空には暗雲が掛かっており、昼を忘れさせるような暗さである。その工場地帯に一台の黒い車が走っていた。ドリフトをしながら、早々と走行している。助手席にいる男性は懸命にその運行に

耐えている。すると、目的の物を見つけた様に車は急ブレーキを掛けた。車体の半分が

中に浮いた。そしてガシャン、という音を立てて止まった。そして二人の男性が車から

出てきた。黒いスーツに身を包み金色のバッチをつけている。相原と神崎である。神崎は演習場で貰った『サムライエッジシ』を握り相原は愛銃、『フォリツジウォーリア』を握っている。

フォリツジウォーリアとは市街地での銃撃戦での戦いに最適な拳銃であり、

テロリストなどの潜伏している街などで軍隊がサブとして使用している。

そして、ガレージの横にあるドアへそっと近づき、安全装置を外す。そして、軽く耳打ちをした。

「神崎、良いか言った通りだ。焦るなよ。」

神崎は頷くと、銃を構えドアノブに手をかざした。そして腰に手をやり、『手榴弾』を

取り出した。手榴弾とは円形で緑色をした小型爆弾であり上のピンを取ると数秒後に爆発し、

突入などに最適なので有る。そして、ピンを外しガレージ内に投げ込んだ。手榴弾は中を舞い落下地点で

爆発した。爆発と同時に相原と神崎がガレージ内に突入その場で銃



を構えた。

「警察だ銃を捨てろ！」

中には数十人のテロリストが武装をしていた。相原達を鋭く睨み付け応戦を覚悟している。そして一人のテロリストがハンドガンの引き金を引いた。弾は外れシャツターに当たった。すると、神崎も発砲したテロリストに向かって威嚇射撃をした。そしてすぐさま近くにあった木箱の裏に身を潜めた。

「先輩。応戦しますか。」

「ああ。神崎、援護を頼む」

「了解しました。」

相原はフォリツジウォーリアをリロードすると、辺りを見渡すと向かいの木箱まで走った。そして木箱に着くと神崎にGOのサインを出した。すると神崎がスツと身を木箱から出し、テロリストの脚を撃ち貫いた。テロリストが悲鳴を上げて転倒する。それを気に相原も次々にテロリストを倒していく、すると一人のテロリストが大声を上げた。

「キング万歳」

相原は違和感を持たず銃撃戦に専念したが神崎は気になったため相原に聞いた。

「先輩、キングって誰なんですか？」

「きつと金城の事だろう、アイツはテロリストのカリスマだからな」

乗り出していた身を隠し相原は弾の補給をした。そしてリロードすると立ち上がった。

「どんだけ敵はいるんだ。まさに蟻の大群だな。」

すると、神崎の木箱が破損し、敵に神崎の位置が明白になった。直ぐに、神崎は前方にある木箱へ移ろうとしたが、奥の方にいたスナイパーに脚を撃たれてしまった。前方に倒れ撃たれた脚を引きずりながら目の前の木箱を目指す。すると神崎の目の前に、テロリストが一人前に現れた。そして神崎の顔面を蹴り飛ばし銃を向けた。

テロリストはニヤリと

笑い引き金に手を掛けた。すると木箱に身を潜めていた相原がその隙を狙いテロリストの肩を撃った。血が大雑把に吹き飛び辺り一面血だらけになったがその隙に神崎はサムライエッジシをリロードし相手の顔面目掛け発砲した。みごとテロリストの胸に直撃。激痛の余りテロリストは気を失った。そのうちに神崎は全力を尽くして木箱に辿り着き、身を木箱に立て掛け弾を補給した。その直後だった。神崎が身を潜める木箱の上にサブ・マシンガンを持ったテロリストが現れた。

撃ち抜かれた脚の痺れで、正確に敵を判断できない。震える手でサムライエッジシを両手で支えるが標準は合っていない。撃ってみるが思うように的を絞れない。

脚の大量出血が神崎の視界を奪い始め目の前の物も見るのが危うい。決死の覚悟で、

腰に手をやり『閃光手榴弾』を取り出ししたがピンを外し起爆まではもう間に合わない

ーここまでか……

神崎が諦めかけたその時だった。テロリストの頭を一発の弾丸が貫いた。撃つたのは

敵の増援に対応していた相原だった。そして、そのまま押し寄せてくるテロリストを次々に討ち取っていった。神崎も体制を立て直し木箱を盾にして身を潜めた。相原が神崎の事を気にかけているが敵の増援は絶えず相原達を襲う。二人の銃口からは火花が絶えない。自分を盾にしている木箱がもう持たないと判断した相原は神崎の居る木箱へ走ることを決意した。しかし、敵の戦力は厚く超えられたものではない。だがこのままの場所に居る訳にはいかない。危険を顧みず相原は銃声が止むのを静かに待った。銃声が止むとガレージ内は緊張感溢れる静かな空間となった。この機会を逃すまいと相原は前方の神崎の木箱へ

ダッシュした。神崎の木箱へは数多の木箱があるが相原は華麗な開

脚で木箱を乗り越え神崎の木箱へ向かう。しかし、それに気づいたテロリスト達は相原を狙い撃ちし始めた。

鳴り止んだ銃声がまた始まり出した。相原は神崎を目前として木箱に身を潜めた。そして

銃声が止んだ途端に神崎の元へダツシユした。神崎が身を立って掛けている木箱に相原は到着すると相原は直ぐに神崎の脇を抱えて出口に向かった。ゆっくりと時間を掛けて安全に脱出しようとする相原に神崎は首を数回ほど横に振り相原の耳元で軽く話した。

「先輩、俺を置いて行ってください・・・困ぐらいにはなりませんよ・・・」

軽く笑みを浮かべた神崎は自分から木箱に身を立って掛けた。そして出血している脚に

ハンカチを巻きつけた。そして弾をマガジンに補給した。狙い撃ちの姿勢を作る神崎を相原は力尽くで肩に腕を抱え歩きだした。そして、懸命に神崎を抱えながら軽く呟いた。

「まだ、任務は終わってない。これから俺たちがどうするかでこの任務が動くのだ。」

相原はそれを言ったきり無言で出口を目指した。すると爆発で真っ黒になっている

床が見え始め二人に歓喜が湧いてきたしかしその時だった。一人のテロリストが出口を

塞いでいた。ガツチリとした装備で防弾チョッキを着用していた。

すぐさま二人は近くにあった物陰に身を潜めた。そして、神崎を静かに立て掛けた。相原の頬から一滴の汗が

流れ落ちた。相原に緊張と疲れが一気に押し掛かる。そして陰からテロリストの出口を

窺った。

「俺だけならともかく流石に神崎は・・・難しい

まさに絶対絶命である。その時だった遠くの方からサイレン音がしたのは。そして段々と音が大きくなっている。そしてサイレン音

が鳴り止むとテロリスト達はざわめき、逃げ出した。

―そうか、神崎が援軍を呼び付けたのか……

―呼吸置いていると突入部隊がガレージのシャッターごと爆破し突入して来た。轟音がガレージに響く。逃げ惑うテロリスト達は突入部隊に次々に精密射撃で脚を撃たれその場に転げ倒れた。もがいて必死の抵抗をするものの簡単に確保されそのまま手錠付きの病院搬送になった。相原達も陰に居るのを隊員に見つけられ無事に確保され二人は一緒に病院に搬送された。搬送途中寝ている神崎に優しい笑みを見せた相原は神崎のブラウスの中に入っていた携帯電話を取った。そして、劣る様な動作で発信履歴を調べた。

あれ、相原は自分の目を疑った。何故なら神崎は今日1回も通話をしていないからである。

―まさか……！

言葉を無くしながら相原は病院へ搬送された。

## 帰還

眩しい太陽の光が目に入ってきた。重い瞼を開けて見るとそこは病院の一室だった。

着ている服は病院のパジャマになっており、ベッドの隣にある机にスーツが置いてある。

―そうか俺は確か……………

寝ている前の事を一つ一つ考え出してみた。テロリスト、金城、銃撃戦……………

何もかもが一瞬の出来事に思えた。再び目を瞑るとある事を思い出した。脚の事である。

撃たれた部分を起き上がって見ようとすると疲れのせいか起き上がることが出来ない。

そんな事しているとドアのノブに手を掛ける音がした。そしてその数秒後にガシャーン

と大きな物音がドアの前でした。不自然だった。神崎は急いで自分のスーツの中にある『サムライエッジシ』を取りベッドの中に隠した。そして、ノブにもう一度手をかざす音が聞こえるとそつとサムライエッジシを引き発砲をする用意をした。ギィィィとドアの

音が鳴る。そしてガチャンとドアがしまる音がするとベッドに隠しておいたサムライエッジシの銃口を向け、誰だお前はっ、と怒鳴り散らした。するとドアの方からドサツという

ビニール袋を落とす様な音が聞こえた。そして銃を向けている神崎の方へ歩く音が聞こえた。静まった病室に緊張がざわめく。そして壁の陰から現れたのは、浅倉だった。

レジ袋を抱え神崎の方を見つめた。重かった空気が一瞬にして晴れた。神崎の緊張感

は無くなり開放感に満ちた。浅倉は辺りを見回し、ベッドの横にある椅子に座った。

そして袋からお握りと缶コーヒーを取り出した。そして神崎を軽く見つめお握りを食べ始めた。豪快にお握りを食べる浅倉を見て神崎はベットに寝そべり怒られる覚悟で話かけた

「部長、先輩は大丈夫なんですか？」

目をギョツとし浅倉の方を見る。浅倉は表情も変えずお握りを食べそつと話した。

「何故任務に出ると言わなかった？」

「そつ・・・それは・・・」

神崎は何も言い返せなかった。いくら相原からの口止めの命令だったとはしても

普通は部長の浅倉に言ってしつかりとした作戦を立てて出勤するもので有ったがそれを

行わずしかも怪我を負って帰ってきた自分の弱さと情けなさが

浅倉の質問と共に心を痛みつけられた。

「俺は部署の仲間を大切に思っている。確かに部署の業績を上げたいとは思ってが

怪我を負って命の危険をさらしてまで上げて欲しいとは思わない。

だから一人で背負わないで皆で助け欲しい。」

神崎は軽くはい、と呟いた。浅倉は食べ終わったお握りのゴミを買ってきた袋に入れて一つにまとめて近くに有ったゴミ箱に入れると椅子から立ち上がりスーツを調べて

ドアの方へ向かい振り向いて神前に言った。

「相原は無事だ安心しろ、今は隣の病室にいる。早い所その脚治して

こっちに戻って来いよ。待ってるぜ」

「はいっ。」

後ろ向きに手を振り浅倉はそのまま神崎の病室を後にした。浅倉が去ったのを見ると、

神崎は目を瞑りそして明日から頑張るリハビリに備えての事を考えゆっくりと休んだので

あつた。

―明日から頑張るぜ！

## The dark zone 1

「ちっ、我が同志達がまた国家の犬どもにやられるとは！」

高画質のデジタルテレビに映る”麻薬関連のテロリスト一味逮捕”のニュースに

激を感じリモコンのスイッチを切る。

そして目の前に有る紙を怒りの余り切り裂き怒り叫ぶ。叫び声を聞いた

スーツ姿の短髪の青年は赤い絨毯じゅうたんが引かれ大理石で出来た廊下を掛け走つり叫び声のした部屋の前に止まり西洋風のドアを部屋の中に聞こえる様に大きく叩く。すると、入れっ！という太い声が部屋の中から聞こえてきた。

青年は、失礼しますと礼儀正しく振る舞い西洋風のドアを開けた。

部屋の中は、廊下と同じく西洋風の造りをしており家具なども一切”和”というものは感じられなかった。

入るとすぐにソファアールがありその後ろには木製のデスクが有り壁には世界中から集められたであろう重火器と防弾チョッキ数着が掛けられていた。

デスクには大きな背もたれが有る社長椅子があり机には数発の弾丸と切り裂かれた紙、

デジタルテレビとノートパソコンが置いてあった。

青年はドアを閉めると一歩も動かずその場に立ち尽くした。そのまま青年が立っているとドアとは反対になっていた社長椅子が回りドアの方へ向いた。椅子には金髪でサングラスを掛け頬に刃物の切り傷の有る日に焼けた筋肉質の男が座っていた。

男はデスク上に有るノートパソコンを操作し始めた。そしてある一定の操作を終えた後、

ドアの前に立っている青年の方へノートパソコンの画面を向けた。

ノートパソコンの画面にはとあるガレージで起こった警官2人とテ



ロリスト数十人の銃撃戦を撮影した  
カメラ映像が流れていた。若き警官は脚を撃たれるが奇跡的に生還  
しているのが

映像からは分かる。男は映像が流れ終わると眉間にしわを寄せた。  
そして低く太い声で話し始めた。

「お前も知っているだろうが、この警官2人によって我が組織は  
大幅な同士たちを

失ってしまった。私は物凄く悲しい。次はもうこの地へ進攻して  
くるかもしれない。

『ジャック』！ 至急同氏たちを精一杯育てあげるのだ！」

男は大きな拳をデスクに力一杯叩きつけ話した。

「はっ！期待通りの育成をしてみます。『キング』！」

ジャックは深々とキングに礼をし、部屋の外へ出るとすぐに廊下  
を走り出した。

キングはジャックの足音を聞き満足したような笑みを浮かべ顎触つ  
た。

今まさに国家転覆を狙う麻薬テロリスト集団の行動が開始された。  
もう国家転覆まで時間は無いのであるだろうか……

## 退院

神崎が病院に入院して数週間が経った。脚の怪我は順調に回復しリハビリも何とか行える状態になった。リハビリに最初は手こずっていたが日々の努力により負傷前と同じぐらいの運動神経に戻す事が出来た。あとは傷が癒えるのを待つだけで有った。

神崎の隣の病室の相原は軽傷だったために1週間足らずで退院し今は麻薬テロリストグループのアジトを掴むため新たなグループと合流し捜査をしていた暇が有れば病室にも顔を出し神崎の事も気に掛けていた。そんな暮らしが続いて数週間、ついに神崎は退院する日が来た。馴染みきった病室とも別れまた警視庁へ戻れるのだ。

神崎は病室に有る荷物をまとめスーツを着こなし最後に主治医の部屋に行くことにした。

アタッシュケースをカ一杯持ち上げまだ歩くのに慣れていない足取りでツルツルとした

廊下をゆっくりと歩いて行った。主治医の部屋は神崎の病室と同じ階に有り行くのはそんなに困難では無かった。途中ナースステーションが有り看護婦たちにお元気で、という言葉をもらい神崎はますます気持ちが高ぶった。ナースステーションを過ぎると一つだけ近寄りがたい威圧の高い部屋が有った。その部屋の周りは蛍光灯の電気が無く

昼間でも夜の暗さを出していた。神崎はその部屋に近寄ってドアを見た。

部屋の名札には”整形外科医 山本”と書いて有った。ドアノブには休憩中というプラスチック札が掛かって有ったが神崎はドアをノックすると部屋の中からどうぞ、という声が聞こえてきた。どうやら山本は休憩は診察室で休憩をしているみたいだった。神崎はドア

ノブをひねり部屋に入った。部屋には診察用のベットと医療器具や薬品が置いてある棚や

カルテなどが置いてある机があった。カルテを書き込んでいる白衣の若い青年がローラ式の椅子に座っていた。山本は部屋に入ってきた神崎を見つけると直ぐに立ち上がり患者が座る時の椅子を取り出し神崎に勧めた。神崎は脚の事も考えゆつくりと椅子に腰を下ろした。旧友の顔合わせのように会話を始めた。

「今日で神崎くんも退院ですか。悲しいね。」

「これも先生のお蔭です。本当ありがとございました。」

椅子に座りながら深々と礼をする神崎を見て山本は爽やかな微笑みを表した。その微笑

みには悲しみの一面も有ったように思えた。

「いえいえ、私は何もしていないよ。私はただ君の手助けをしただけだ。」

「手助けですか・・・」

「そうだよ。私たち医者は患者の手助けする事が仕事なんだ。

時には辛い宣告を神のお告げみたく言わなくてはならないがその分全力を尽くして患者を救いたいと思うんだ。だから神崎くん君も諦めず頑張って刑事をやってくれよ。」

「はいっ！」

大きな声で返事をする、後ろから看護婦が部屋に入ってきて神崎に上司の方が一階でお迎えに来ておられますと言付けをした。神崎は急いでアタッシューケースを持ち上げ山本と看護婦に一礼すると脚を引きずりながらナースステーションの方に有るエレベーターまで行き開閉ボタンを押しエレベーター内に入った。アタッシューケースを置き一階のボタンを押してエレベーターで一階に下った。あまり良いとはいえない乗り心地で下るとドアが開きアタッシューケースを持ち上げてエレベーターの外へ出た。一階のフロアーにはインフォメーションセンターと売店、休憩室が有り診察患者の待機用のソファなどが有った。

辺りを見回し歩くとインフォメーションセンターに一人のスーツ姿の男性が立っていた。そして軽く微笑んで手をこちらに振っているのを見つけると神崎は脚を引きずりながら駆け寄っていった。近づいていくとそれは相原で有ることが分かるようになりますます気持ちが高ぶった。相原の所へ付くと相原は神崎に向けてグットサインを出してこう言った。

「待ってたぜ。神崎。」

相原はそう言うといんホームーションセンターの係員に礼を言い自動ドアの大きな正面出入り口へ向かった。神崎はその背中を追うようにして走っていた。

今日にて神崎はまた刑事として復帰するのであった。

## 戻ってきた新人刑事

ここは地下駐車場である。昼でも有るのに出入り口付近以外は蛍光灯の光で照らされており、肌寒い温度の中で駐車場は静まっていた。この駐車場は車が決められた位置に停車しており適当な所へおく違反の車などは無くきつちりとしていた。その駐車場に一台の黒い高価そうな車が低速で地下駐車場へ入ってきた。車は満車エリアを抜けて空きの有るエリアを探して駐車場を徘徊すると車と車の間に有った空いている所に綺麗にバックしながら駐車した。数秒経つとその車からツンツン頭の男性が隣に有った車にドアを当てないよう気を配りドアを開けて出てきた。相原である。逆側からはついさつき退院した神崎がアタツシケースを持ちフラフラとしながら出てきた。神崎は伸びをし空気を吸い満足した顔をした。それを見た相原は笑みを浮かべるとドアにロックを掛け車の前に立った。神崎もそれが終わると直ぐに相原の所へ行った。そして2人は駐車した所の近くにあるドアへ向かった。相原は神崎の脚の事も考えてゆっくりと歩いたが神崎はそれを遠慮し相原のスピードに付いていくことにした。辛い表情は出さず頑張つて追いついた。ドアへ着くと神崎はドアを開け相原を部屋に先に入れその後部屋へ入った。部屋にはエレベーター3つと煙草、飲料の自動販売機それと2、3人が座れるほどの小型ベンチがあった。この部屋は地下駐車場と警視庁を結ぶ場であり警察関係者のみ使うことができるものでエレベーターは警視庁内にある部署の2階へ一気に通じていた。神崎はエレベーターの開閉ボタンを押してエレベーターを呼んだ。数秒でエレベーターが到着すると相原と同時にエレベーターに乗り開閉ボタンを押し閉めエレベーターを2階へ上げた。決して良いとは言えない乗り心地だが乗つてすぐに2階へ着いた。そしてエレベーターから廊下へ出た。廊下は入院前とは変わらず人が溢れており活気があった。エレベーターから軽く歩くと神崎にとつては久々の「テロリズム取

締課」のドアへ着いた。ここに来るまで時間がかかったなこの日を  
どれだけ待ったのだろう、神崎は小声で軽く咳くと目を輝かせなが  
らドアノブをひねり部屋へ入った。入院前とは変わらない状況が見  
えた。真面目に仕事をやっている人や、

捜査が終わり休んでいる人全てが神崎を安心させることが出来た。

二人は前方に見える

『部長席』へ行った。部長席にはコーヒーをすすりながらパソコン  
のモニターを見る浅倉が座っていた。相原が声を掛けると浅倉はコ  
ーヒーをこぼさないようにゆっくりと横に動き首をあげた。そして  
部長席の前にいる二人を見ると持っていたコーヒーを机に置き柔ら  
かな表情で話した。

「待っていたよ。神崎おかえり。」

「ありがとうございます。」

一礼をした神崎に浅倉は立ち上がって握手を求めガツチリと交わ  
し椅子に座って話を進めた。

「神崎がいない間に相原を二人組みのチームに合流させているか  
ら今日から神前にもそのチームに合流してもらおう。」

今の状況を話す浅倉にあいづちをする神崎、それを見つめる相原  
三人がやり取りしている時に、浅倉の所に赤髪と青髪の男性二人が  
やってきた。二人はスーツに身を包み胸には金色バッチを付けてお  
り一軒で警察関係者だと分かった。浅倉はやってきた二人に気づく  
と話を変えた。

「さつき言っていた二人だ。紹介しよう赤井と沼井だ。」

浅倉は赤髪、青髪の順番で紹介した。神崎は二人の前に行き神崎  
です、といい礼をした

「今日からこの四人で一チームとして活動してもらおうぞ。」

神崎の止まっていた刑事生活が今動き出したのであった」。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6659o/>

---

夢の中の刑事物語

2011年10月8日04時39分発行